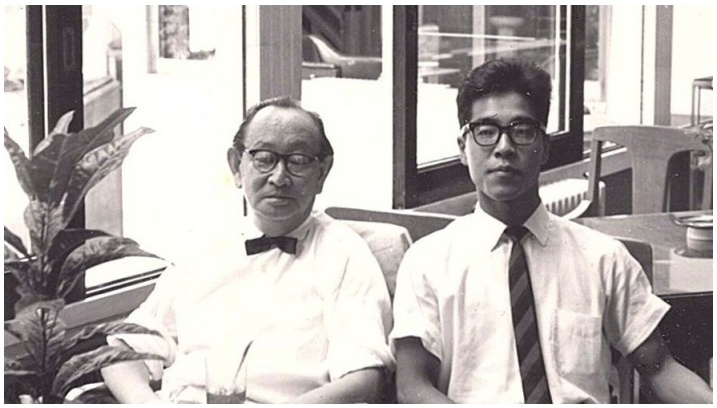
宮崎会員の随想「忘れ得ぬ労使の人々」番外編・第１７話

「絵画鑑賞の要諦」　富永惣一　国立西洋美術館長　美術評論家

久しぶりに何冊か本を読んだ。いつものように手あたり次第の乱読であるが年を経るに従い時代物が断然多くなった。かつて仕事で目を通した経済や経営、学術書の類はよほどのことがない限り目を通す気にもならなくなった。
疲れてふっと息を抜くと、書棚の片隅にある古い本が目に留まった。亀井勝一郎著「私の美術遍歴」である。３０～４０代の頃に買い求めたうちの一冊であろうか、だが難解な書物であったとしか記憶に残っていない。
それにしても“美術遍歴”ちょっと素敵な響きを持つ言葉ではあるまいか。その字づらに触発されて少しばかり気取って自身の美術遍歴とやらをなぞってみる気になった。

思い起こせば美術とか絵画というものに興味を抱いた最初の体験は、今から半世紀も前に
さかのぼる。それは仕事で箱根富士屋ホテルに滞在中のことであった。
テレビや専門誌などにしばしば登壇し、当代一の美術評論家として著名な初代国立西洋美術館長の肩書を持つ冨永惣一先生とご一緒する機会に巡り合った時のことである。
ホテルのロビーで初対面の挨拶が済むや、先生はチェックイン前に「このホテルには良い絵画やデッサンが沢山あります。部屋に入る前にひとまわりしたいので付き合って下さい」とお供を仰せつかったのである。



箱根富士屋ホテルロビーの富永惣一先生

無教養の私は慌てて絵は難しくて勉強していませんので・・・・と逃げを打った。
富永先生はすかさず「そう難しく考えなさんな。まず絵を前にして眺め、色がきれいとか構図は楽しそうだとか、なんだかおかしな絵だとか自分が感じるまま眺めればいいのですよ。絵を見るに小難しい理窟はいりません」とやんわり諭された。先生に従って歩いてみると、クラシックなホテルの廊下やロビー、ちょっとしたパブリックスペースなどに絵やデッサンが幾点もさりげなく飾ってある。
私はすでに幾日も滞在しているにもかかわらず、無関心であった故にそこここに絵が飾ってあることすら、まったく気づこうともせず過ごしてきた。思わず顔が赤らんだ。
先生は時々ホーとかウンとか独り言をつぶやきながら、私を供に約２時間、作品を丁寧に見て歩かれた。時には無知な私を相手に静かに語りかけ解説を加えながら館内を一巡したのである。富士屋ホテルのオーナーである山口課長が、かつてこのホテルに宿泊したヘレンケラーやチャップリンのサインした分厚くて古びた宿泊帳を先生に見せていた。
この時、はからずも日本の美術評論界の第一人者である富永先生に“個人教授”を受けるという、これ以上望むべくもない絶好のチャンスであったにもかかわらず特に絵にひかれるでもなく、真にもったいない

話だがこの場限りで終わってしまった。
美術に親しむ二度目のチャンスは、尊敬する労働界の重鎮として名高い滝田実ゼンセン同盟会長との出会いである。氏は絵画にも造詣が深く自ら絵筆をとり、武者小路実篤氏とも交流のある文化人であるが、あるとき私に「あなたが絵に興味を持つなら、ニュートン（アメリカ製の高価な水彩絵の具）を僕がプレセントするよ」と言われた。「いえ、私はそちらの方はまったく不調法で・・・」と言葉を濁した。
三度目のチャンスは４０歳のころに巡ってきた。初めての欧州視察旅行の時である。三週間に及ぶヨーロッパ文明の洪水の中で、毎日くらくらする思いに浸っていた。
パリのホテルで朝食をとっているとき、前に座った住友電工の後に社長となる川上哲郎氏から「今日一日、一緒に美術館巡りをしませんか」と誘われた。「絵はさっぱり判りませんので・・・・」と尻込みした。すると重ねて「あなたは仕事上さまざまな方々とお付き合いするでしょう。これから絵は判らない、嫌いです。と言うわけにもいかないのでは・・・？」「今日は勉強と思って私に付き合いなさいよ。いや、これは余計なお節介かな」と笑われた。
このことがきっかけとなって、帰国してからよし美術史を少し勉強してみようと思い立ち、さっそく美術全集を何冊も買い求め一生懸命読み耽った。テレビの美術番組を面白くもないのに勉強と思い一生懸命視聴したのはこのころであった。書棚に並ぶ亀井勝一郎の書もおそらくこの頃買い求めたものと思われる。
不思議なもので、いつの頃か上野の美術館やデパートの絵画展などへ家族を連れてピクニック気分ではあったが出かけるようになった。
仕事で時々海外へ出かける機会にも恵まれ、その都度時間の許す限り美術館巡りを繰り返し、いつの間にかそれは海外出張の大きな楽しみの一つになった。おかげでこれまでいい絵を随分沢山みてきた 。
人類の至宝といわれる名画に出会うたび心がときめいた。富永先生ならこの絵にどんなコメント出すのかなど過ぎた箱根のひと時を思い浮かべることもあった。
私は絵の専門家でもマニアでもないが絵の前にたたずむと至福の心地と云ったものであろうか。えも言われぬ、ゆったりとした気分になるのである。そのきっかけを作ってくださった富永先生に心の中で御礼申し上げるのである。
川上さんは今や住友電工の会長職につかれ、関西財界の雄として活躍されている。たまたまお会いした席で、２０年も前のパリでの想い出話を申し上げたところ「そんな生意気なことをあなたに言いましたか・・・いやーお恥ずかしい」と苦笑された。
ところで日本が高い経済成長を誇り、世界の一等国への仲間入りを果たそうとしていた頃、私たちの価値観は経済最優先であった。
一方ヨーロッパの先進諸国の文化や歴史、芸術、個人生活等を大切にする生活態様をみて、これを評し働くことを忘れてしまった国、斜陽の国、さらには文明病と笑った。しかし振り向いてみると実は笑った私たち自身の心が貧困であった気がしてならない。
物質的な豊かさが幸せをもたらす全てと錯覚し、馬車ウマのようにひたすら働きづくめであった。その結果物質的豊かさはほぼ達成したと云ってもよいだろうが、しかしここでホッと一息ついて越し方を眺めると何か満たされない思いがする。
心がむなしいのである。心が求める豊かさとは何か、それは個人によって様々であろう。例えば時間や情報からの解放であったり、またある人には美術や音楽の世界に浸りきることであったり、あるいは健康

やスポーツ、趣味に生きることかもしれない。さらには宗教や社会に奉仕することに満足を見出す人もいるかもしれない。幸せや満足は決して他人から与えられるものではないように思うのである。
昨今世の中は混沌としていて、進むべき方向がよく見えない。こんな時こそ豊かでゆとりある自らの人生とは何か、改めて自分自身に問い直してみるいい機会である。目下私の心のオアシスはいい絵を見ることである。
それにしても亀井勝一郎氏の「私の美術遍歴」を今読み返しても難解であるが、“宮崎汎の美術遍歴”のきっかけを作って頂いた富永惣一先生との出会いを懐かしく思い出しつつ、私の絵画を楽しむ原点は先生の言葉「絵を見るに小難しい理屈はいりません。見たまま感じたままでいいのです」である。
どこかの美術館で絵を見ながら先生の解説をお聞きし、先生のお供をしながらさ迷ってみたいものだと箱根でのかつての出会いを懐かしく思い浮かべる。